

子どもの経験を質的に描き出す試み

— M-GTA と TEM の比較 —

境愛一郎・中西さやか・中坪史典

(2012年10月2日受理)

Methodologies of Qualitative Research for Describing Children's Experiences
— A comparison of M-GTA and TEM —

Aiichiro Sakai, Sayaka Nakanishi and Fuminori Nakatsubo

Abstract: The purpose of this study is to clarify, compare and contrast the features of the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA) and Trajectory Equifinality Model (TEM) methodologies and to explore the possibility for using them to describe children's experiences in the field of early childhood education and care. These are qualitative research methodologies. First, in this the study, cases were collected by observing the scene where a target child carries out a target activity in a kindergarten classroom setting. Next, the cases were analyzed based on the common research question, using both the M-GTA and TEM approaches. By examining and analyzing the results using each methodology, it was clear what kind of knowledge is acquired from cases by using each methodology, and what kinds of problems each methodology has. Further examination showed that the feature in M-GTA that describes the process of a child's experience provides a structure and framework for explaining a child's activity. On the other hand, it became clear that the TEM approach describes the process of a child's experience itself, and that a TEM analysis can lead to great understanding of an individual child's experiences and transformation

Key words: qualitative research, methodology, M-GTA, TEM, ECEC

キーワード：質的研究, 方法論, M-GTA, TEM, 保育

I 問題と目的

1. 質的研究の隆盛

質的研究についてフリック (1995) は、「具体的な事例を重視して、それを時間的、地域的な特殊性の中で捉えようとし、また人々自身の表現や行為を立脚点として、それを人々が生きている地域的な文脈と結びつけて理解しようとする分野」であると説明している。こうした質的研究が、量的・実証主義的な研究では追えなかった問題を扱うことのできる方法として注目を集めるようになって久しい。とりわけ、教育学、社会福祉学、看護学、医学などの実践的なヒューマンサービスを研究対象とする分野への浸透は顕著であり

(大谷 2008a)、個人や個別的な事柄を扱うことができる (無藤 2008)、対象の複雑性や全体性を損なうことなくそのリアリティに迫ることができる (衣笠 2003)、といった特徴が、各分野が抱える課題に結びついていることがうかがえる。

こうした動向から、質的研究の理論やデータ分析の方法を初学者などに公開する動きも活発であり、例えば『質的心理学研究』において、初学者向けの文献の書評特集 (日本質的心理学会 2010) が組まれるなど、多種多様な文献が刊行されている。そうした文献のなかには、特定の方法論についてのある程度「標準化」されたデータ収集や分析の方法を提示したものも多く見られる。例えば GTA (Glaser, B. & Strauss, A. L.

1967), KJ法(川喜多1967), M-GTA(木下2003), SCAT(大谷2008b), TEM(サトウ2009), TAE(得丸2010)などでは、分析手順や結果の提示の仕方などが詳細に解説されている。こうした各方法論についての文献の充実、質的研究を試みようとする初学者に、明確な作業過程や模範例をもたらしめるものであり、研究の遂行を強力にバックアップしているといえる。このことを鑑みれば、「データの分析方法がわからない」という初学者が陥りやすいとされた問題(大谷2008a)については、現在では各種方法論というガイドが手近な形でいくつも示されており、初学者は目的に応じてそれらを選択するという状況になりつつある。

しかしながら、そうした方法論の氾濫は、初学者が選択する際に混乱を招くとともに、質的研究が「標準化」された方法論にただ従うものになることで、内容を欠いた「お手軽な研究」(田垣2005)や、方法が目的化した研究(西條2007)へと陥りやすい状況につながっていることも危惧される。そのため、今後、質的研究の方法を提示していく上では、数々の方法論を比較する試みによってそれぞれの実際的な有効性や課題を明らかにし、初学者が依拠する方法論を選択する際に参考となる知見を蓄積していくことも、また重要であると考えられる。

2. 保育学分野における質的研究

先のような特徴をもつ質的研究は、保育学の分野でも、目の前の子どもたちの生活の様態や、友だちや保育者との関係性を理解する上で有効とされ(無藤・倉持2009)、独自のシンポジウムが開催されるなど注目を集めている(岡本・砂上・瀧川・無藤2004)。また、保育所や幼稚園をフィールドとした研究では、伝統的に子どもの姿を記録し解釈するという質的研究的な手法が用いられてきたとの見方もある(小山1998)。いずれにせよ、保育学分野において質的研究は、子どもの経験を捉える手法として受け入れられ、用いられているといえる。

こうした保育学分野において、子どもを対象として行われてきた質的研究では、個人や集団の行動や会話といった生活の様子をもとに逸話記録(柴山2006)を作成し、それに対して詳細な考察を行うという方法が広く採られてきた。また、そうした記録では、目に見えるものだけでなく、その背後にある子どもの意志や感情の状態といった体験の世界の見取りをも含めることにより、子どもや保育を生きたまに捉えることができることとされてきた(津守・松井・本田・浜口1974)。こうした特徴は、「問主観的なもの」を描くエピソード記述(鯨岡2005)においても共通している

といえ、研究者が感じた保育現象、子どもの経験をあがままに表現し、分析できる手法として支持されている(奥山・佐藤2006;荒木2009)。

他方で、こうした逸話記録の考察による研究の課題も指摘できる。その1つとして、このような研究では、逸話として記した事例の引用とその解説に多くの紙面とエネルギーが注がれる反面、事例及び事例間に存在する構造や秩序の解明といったことがおろそかになりかねないという点である。これについて能智(2011)は、実践事例の報告においてよく見られる記述形態として、知見の生産を目指す研究では望ましくないと述べている。加えて、佐藤(2008)は、ローデータの引用が過剰な場合は、論文全体の文脈や論旨に対する読者の理解を困難にしてしまうことを指摘しており、表現上の伝わり難さもこの種の研究が孕む危うさであるといえる。これらは、保育学分野においても課題視されており、先にあげたシンポジウム(岡本・砂上・瀧川・無藤2004)では、従来の手法の理論生成力、概念生成力の弱さが指摘されている。

以上を鑑みれば、子どもの経験を捉える方法に関しては、個々の逸話記録の分析を主とした従来の手法に加えて、事例間の関連性や子どもの言動を説明する理論等の生成を目指した方法論や、事例の内容や得られた知見を明確に提示できる方法論を模索していく必要性があるといえる。そうした試みにより、従来の方法による視点とは異なる子どもの姿にスポットが当てられ、子どもや実践に対する多角的な見方を開かれる可能性があると思われる。

3. 本研究の目的

ここまで、質的研究全体における方法論の氾濫に関する問題と、保育学分野における子どもの経験を描くための方法論に関する問題を取り上げてきた。前者の問題では各種方法論の比較が、後者の問題では従来とは異なる方法論を用いた分析の試みが求められている。

そこで本研究では、質的研究の方法論であるモディファイド・グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)(木下2003)と複線経路・等至性モデル(以下、TEM)(サトウ2009)を用いて、共通の手続きで収集した子どもの観察事例を、共通の研究課題のもとでそれぞれ分析し、各方法論による子どもの経験の描かれ方について検討することを試みる。それにより、各方法論の分析上の特徴や課題を具体的な作業を通して整理するとともに、子どもの経験を描く手法としての可能性を探ることを目的とする。

本研究において、両方法論を取り上げる理由は次の3点である。第1に、両方法論とも明確に分析の手續

きが示されており、解説的な文献もこれまでに多数刊行されているなど（木下2003；2005；2007；2009；サトウ 2009；荒川・安田・サトウ 2012；安田・サトウ 2012）、初学者が参入しやすい条件が整っている点である。そのため、今後も多くの初学者が使用を試みる事が予想される方法論であり、保育学分野においても、比較的容易に取り組むことができる方法論であるといえる。加えて、少数事例からの適用が想定されていることも、取り組みやすさという点において重要なポイントであるといえる。

第2に、いずれの方法論も、テキストデータを対象としており、それをもとに現象に存在する理論や構造を発見したり、分析結果を視覚的に表現したモデルを描いたりできる点である。これにより両方法論では、保育学分野において有効とされてきた逸話記録をそのまま分析データとして、課題とされてきた理論生成や結果の表現に取り組むことが可能である。そのため、同分野において導入しやすく、有効性のある方法論であると考えられる。

第3に、両者とも、現象のプロセスを捉える方法論であるとされているが、プロセスに対する捉えには相違点がある点である。M-GTAでは、プロセスとは現象の「変化の様態」と表現される（木下 2003）。他方で、TEMにおけるプロセスは「時間が持続する中で対象や現象の変容」というように時間というキーワードが強調され、M-GTAというプロセスとは異なることが暗に示されている（荒川・安田・サトウ 2012）。こうした理論的な相違が、実際の分析結果にどのように現れてくるのか、また、子どもの経験を描く上でどういった可能性をもたらすのかを明らかにすることは、各方法論の特徴を明確にし、保育学分野への提案を目指す本研究において有意義であると考えられる。

なお、M-GTA 及び TEM の詳細な理論背景や手続きの解説は、各引用文献に委ねるものとして割愛する。

II 対象と方法

1. 事例収集と課題設定

(1) 観察による事例収集

調査協力幼稚園において、A男を対象児に設定し、2010年4月から2011年2月までの計18日間に渡って、自由遊び時間中の様子をビデオカメラで記録した。A男は、2010年4月当時、新入の4歳児であり、新しい環境との接触による変容が顕著に見られると考えられた。映像の総記録時間は18時間17分35秒であった。

次に、全映像中でもっとも継続的かつ、多様な活動のパターンが得られた「木登りへの挑戦場面」に着目

し、該当場面をテキスト化することで事例とした。事例は5日間10事例が見られた（表1）。なお、1つの事例は、A男が木に登りはじめてから地面に足が着くまでを基本単位とし、連続して複数回の挑戦が行われる場合はそれぞれを別々の事例として記録した。その際、文脈上新たに行われた挑戦は「新規」、直前の挑戦から連続して行われた挑戦は「継続」と付して区別した。

表1 対象事例一覧

記録日	事例No	挑戦の成否	事例の連続性
2010/6/10	1	×	新規
	2	×	継続
	3	×	継続
	4	○	継続
2010/9/17	5	×	新規
2010/11/5	6	×	新規
2010/12/4	7	○	新規
	8	○	継続
	9	×	継続
2011/2/4	10	○	新規

(2) 課題設定

「A男の木登りに対する挑戦はどのように展開されていくのか」を共通検討課題として設定した。この課題に対し、M-GTA と TEM のそれぞれの方法論を用いてアプローチしていく。

2. M-GTA による分析手順

分析ワークシート（木下 2003）に従い、全事例から概念を生成した。概念とは、研究上重要な意味をもつと思われるデータ中の語句や文脈を、その解釈上の意味を説明するラベルに圧縮したものである。例えば、「地面に降りたA男は、走って木へと向かい、上手に木登りをする友だちの様子を下から観察する」という事例3の一文からは、A男が挑戦を達成するためのヒントを友だちから得ようとしているという解釈ができたことから、「手本となる友だち」という概念が生成された。こうした概念が一定数生成された段階で、今度はそれらを統廃合し、複数の概念を包括的に説明するカテゴリーを生成した。さらに、そこから各カテゴリー間の関連性や順序性を検討していき、カテゴリー同士をその関係性を表す矢印でつなぎ合わせるようにして、A男の挑戦の展開を説明するモデルを描いていった。この過程で、モデルの中核となるカテゴリーをコア・カテゴリーとして設定した。

3. TEM による分析手順

TEM の分析においては、2010年6月10日に連続して見られた事例1から事例4までを分析対象とした。続いて、該当事例中に見られるA男の言動を抽出して

いき、その内容を端的に説明したラベルを作成した。例えば、先の「地面に降りたA男は、走って木へと向かい、上手に木登りをする友だちの様子を下から観察する」という一連の行為の場合は、「K男の登り方を下から観察する」というラベルとなった。こうして作成したラベルを実際の時系列に従って配置することにより、最初に挑戦に興味を示したことを始点、満足して挑戦を終えることを「等至点」(TEMでは、対象が最終的に至る状態を「等至点」と設定し、始点からそこに至るまでの径路を描く)とした一連のプロセスモデルが描かれた。そこへ、プロセスの時期区分や外的な影響要因などを書き込んでいった。また、実際には見られなかったものの、可能性としてはあり得た選択肢に関するラベルを作成し、モデルに挿入していった。このデータ外の事象を想定しモデルに組み込むといった手続きは、M-GTAでは見られないものである。

次章以降では、M-GTAとTEMを用いた分析の結果をそれぞれ概括する。その後、分析によって得られた知見を、それをもたらした各方法論の特徴と合わせて述べる。同様に、各方法論の特徴により生じたと思われる分析上の課題や困難についても示していく。

Ⅲ M-GTAによる分析結果

1. 分析結果の概要

分析の結果、3コア・カテゴリーと11カテゴリー、25概念が生成された。それらを、関係性を表す矢印でつなぐことで作成されたモデルが図1である。以下では、モデルをもとに、A男の木登りに対する挑戦が展開されていくプロセスの構造を概括する。なお、文中のコア・カテゴリーは<>、カテゴリーは<>、概念は【】を付して示す。

このモデルでは、A男の木登りに対する挑戦が展開されていくプロセスの構造を、天秤のメタファーによって表現している。A男の挑戦は「やってみよう」、「やってみせよう」という気持ちを喚起する他者の存在をきっかけに生起する(≪土台としての他者≫)。こうして生じたA男の挑戦は、まるで天秤が左右に振れるように、課題の難易度(≪制御可能な領域>≪制御不能な領域>)や活動の価値や周囲の態度(≪付加価値の設定>≪土壇場の粘り>)の総合的なバランスによって推移していく(≪展開の天秤構造≫)。最終的に、天秤の釣り合いが取れば【活動への満足感】が得られ、反対にどちらかの極に傾き続けるように各要素が作用するならば、挑戦への意欲が失われ≪活動の中断>へと至るのである。

2. 分析から得られた知見

(1) 挑戦の展開を左右する諸要素

概念やカテゴリーを生成していく過程で、挑戦の過程に存在し、その展開を左右している要素がデータから浮上してきた。具体的には、保育者や友だちといった他者の存在や挑戦の難易度、それらによって喚起された感情などの要素が、挑戦の展開に深く関わっていることがわかった。また、それらが概念とそれを包括するカテゴリーという図式で整理されることで、各要素に関する構造的な理解が得られた。例えば、挑戦上の<制御可能な領域>とは、【手本となる友だち】など4つの概念によって構成されていることがわかった。このようにM-GTAの手続きは、事例中の雑然とした情報から、研究上重要な要素を概念やカテゴリーという形で浮かび上がらせ、整理された形で把握することができるといえる。

(2) 要素間の関係性

事例から浮上してきたカテゴリーや概念の間には、順序性や関係性が存在している。M-GTAは、それらの発見を促すと同時に、表現できる方法といえる。たとえば、本分析結果における<土台としての他者>は、他者がA男の挑戦を開始させるプロモーターとして作用することを説明しているため、挑戦が開始してから作用してくる要素の前段階に存在している。また、<ものたりない感>と<付加価値の設定>の間には、双方の作用がせめぎ合うなかで挑戦の価値が決定されるという関係性がある。こうした要素間の順序性や関係性は、事例から概念・カテゴリーを生成し、モデル化していく作業の繰り返しのなかで見出されたものであり、事例を概念に、概念をカテゴリーに、カテゴリーを1つのモデルに、といったように分析結果を絶えず構造化していくM-GTAの分析過程が促した知見であるといえる。

(3) 挑戦が展開されていくプロセスの全体構造

上記のようなモデル化を進めていくなかで、現象中の種々の動きや要素を網羅し、その間の関係性を紡ぎ合わせた現象のプロセスの全体構造が描き出されてくる。本分析ではA男の挑戦のプロセスが、他者を土台として生起し、難易度や価値の影響により天秤のように推移する全体構造として描かれた。このモデルは、全事例から生成された概念によって構成されており、達成に必要な経験が乏しい初期の事例から、達成が容易になった後期の事例に至るまで、おおよそ全ての事例の挑戦プロセスが説明できるものになっている。こうした全体構造としてA男の挑戦のプロセスが描かれることで、挑戦の展開を左右する各要素が、どういった状況や段階で、どのような結果につながる形で影響

しているのかを俯瞰的に把握することができる。また、挑戦に対する知識・技能の有無、他者の応援の有無などに応じて、挑戦がどのように展開していくのかを説明・予測する枠組みとして活用することができる。例えば、目の前のA男が比較的順調に木登りを進めている場合には、〈ものたりない感〉が喚起され、次に〈付加価値の設定〉につながる行動をとることがモデルから予想できる。こういった知見は、子どもが経験している内容の理解や、それに基づく援助の構築などの際の理論枠組みとして有意義であると思われる。

(4) 類似した現象を説明する暫定的な仮説

M-GTA による知見としても一つ指摘できるのが、分析対象を越えて現象を説明・予測する暫定的な仮説が得られる可能性である(木下 2009)。先述のように M-GTA では、概念生成の過程で、事例中の言葉がより抽象度の高い言葉へと置き換えられていく。そのため、最終的に組みあがった構造やその一部が、対象児や対象場面以外にも適用できるものとなっていることがある。

本分析結果の場合では、まず、A男以外の幼児が木登りに挑戦する際のプロセスを説明できる可能性が考えられる。図1は、経験の蓄積量の異なるさまざまな

A男の挑戦プロセスを包含している。従って、図1は幅広い挑戦の水準にある幼児の動きを捉え、予測するための暫定的な枠組みとしての活用できる可能性があると思われる。第2は、挑戦という要素を含む木登り以外の活動のプロセスをも説明できる可能性である。他者や難易度が活動の展開を分けるという見解は、縄跳びや竹馬といった活動にも一部当てはまることが先行研究よりわかっており(木村・村岡 2007; 想厨子 2010)、ここで明らかとなった知見やその一部が、より幅広い活動を説明する際の仮説となる可能性が考えられる。このような知見の有効範囲の拡大により、特定の事例を対象にした研究の結果を、より一般的な文脈に位置づけて活用したり、新たな検討範囲を開拓する上での足がかりとしたりすることができる。

3. 分析上の困難と課題

(1) 事例の具体性・時系列の捨象

以上のように、M-GTA は、複数の事例から生成した概念を1つのモデルとして構成していくことで、種々の事例における子ども経験のプロセスを幅広く説明できる全体構造を明らかにする方法論といえる。一方で、こうした分析方法は、事例の数が増えるほどに

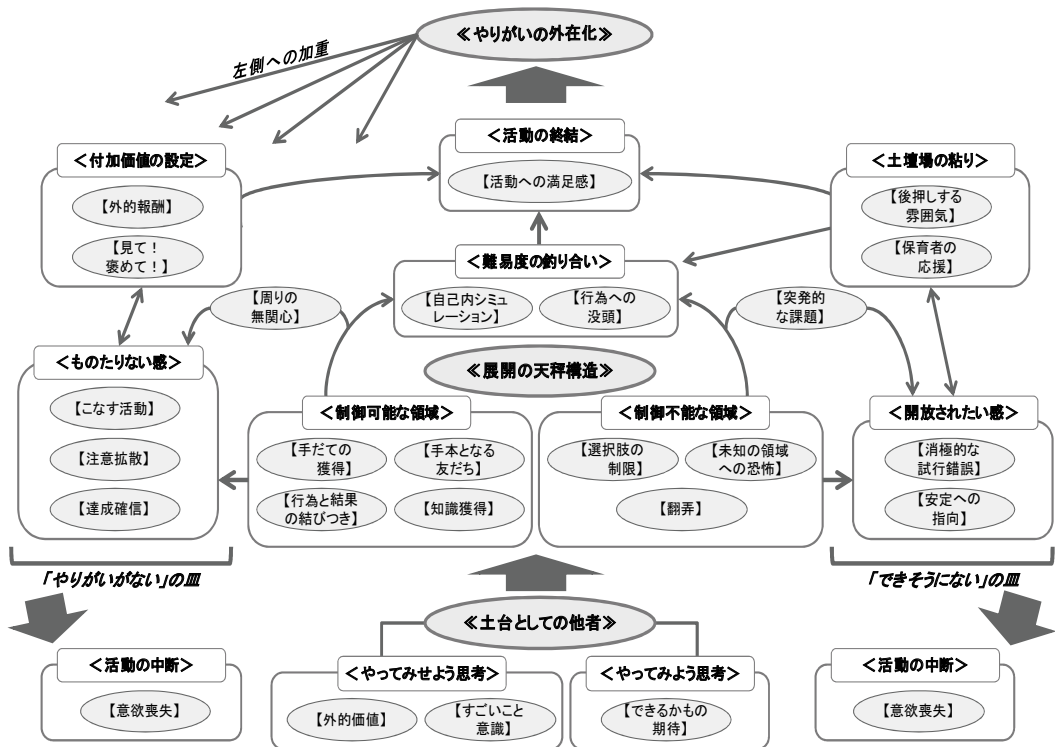


図1 M-GTA によるモデル：A男の木登りに対する挑戦プロセスの構造

個々の事例のもつ具体性や時系列が失われていくという問題を孕んでいる。類似した文脈を各事例から集めて1つの概念として抽象化する過程では、文脈間の事実の前後関係や微妙な状況のちがいをある程度削ぎ落とすことを迫られる。そのため、対象児が関わった人物1人ひとりの性質や、特定の事例にしかみられなかった些細な行動の意味などを考察し、表現することには困難が伴う。また、示されたモデルも、あり得るプロセスの要点を俯瞰したものとなるため、そこから各事例で対象児が辿ったプロセスの詳細や、そのなかでの変容などを理解することは難しいと思われる。

(2) 対象データの肥大化

MGTAは、複数のデータを紡ぎ合わせることで、より抽象度が高く、多くの事例を説明できる概念を生成し、モデルの説明範囲を拡大していく方法論という側面をもつ。そのため、対象となるデータが少なかったり、特定の内容に偏っていたりした場合には、モデルの説明力や説明範囲が必然的に小さくなる。例えば、本研究の事例1のみを分析対象にした場合には、【すごいこと意識】に類する概念を始点とし、【翻弄】、【安定への指向】、【意欲喪失】へと繋がる直線的なモデルができあがるだろう。こうしたモデルは、個別事例の大掴み的な要約でしかなく、他の事例の内容を説明することが困難である。モデルの信頼性をより高めるためには、関連する事例をできる限り多く、幅広く収集し、それらの関係性を粘り強く見出し、こうとする姿勢が不可欠である。言うまでもなく、こうした努力は丁寧な研究を行う上では必要なものであり、惜しむべきものではない。しかし、実際問題として方法論の選択は、時間・予算等の制約のなかで行われるものであり、こうした方法論を用いる際に必要な時間や労力も、初学者にとっては把握しておく必要がある問題である。

IV TEMによる分析結果

1. 分析結果の概要

ここでは、図2をもとに、TEMによって描かれたA男の木登りに対する挑戦のプロセスを、分析結果から見出された時期区分に沿って概観する。なお、TEM図を描く際に用いる基本概念の説明は引用文献に委ね、ここでは必要最小限にとどめる。

(1) 挑戦との出会いと翻弄（第1期）

先に挑戦する他児の姿という「社会的ガイド」（対象者の選択肢の拡大を促す社会的影響）（SG 1）により、「木に登ってみる」というプロセスの「必須通過点」（類似のプロセスを辿る多く人が経験すること）に至るも、有効な登り方がわからず諦めて保育者の所へ避

難する。

(2) 保育者を追っての挑戦と手本の獲得（第2期）

振り所としていた保育者が木登りに関心を示すという「社会的方向付け」（選択肢を抑圧する社会的影響）（SD 1）により挑戦に戻る。その挑戦の際に、保育者から助言や応援を受ける（SG 2；SG 3）。A男は、保育者に言われた通りK男を手本にしはじめ、以前より粘り強さも見せる。だが、挑戦自体は失敗に終わった。

(3) K男と保育者を支えとしての知識と手応えの獲得（第3期）

次の挑戦に行く前に、A男は「K男の登り方を下から観察する」（「分岐点」：等至点へ向かう経路を分けるポイント）。これにより方法を学んだ（SG 4）A男は3回目の挑戦に挑む。保育者の賞賛と応援を背に受け（SG 5）登り方を試行錯誤するなかで、木の性質に気付き、そのおもしろさに笑顔を見せる。その後、バランスを崩したためA男は挑戦を仕切り直すことにした。

(4) 経験の総動員と満足感の獲得（第4期）

改めてK男を観察したあと、4度目の挑戦をはじめた。この挑戦は、K男に先導されるような形になり（SG 6）、A男はK男を参考にしながら、慎重に木に登っていく。ゴールであるハシゴに差し掛かったとき、保育者や他児から賞賛をうけたA男は（SG 8）、笑顔でそれに応えつつハシゴを降りる。そして、保育者にガッツポーズし満足したように挑戦を終えた。

2. 分析から得られた知見

(1) A男の挑戦に関する一連のプロセス

モデルを描く過程で、事例1から事例4におけるA男の挑戦の一連のプロセスが鮮明になった。図2からは、A男の一連の挑戦が、興味本位での挑戦と挫折、保育者を介した再挑戦、他者からの学び、試行錯誤による知識の獲得、それらを総動員しての成功と満足、といったプロセスで変遷していたことが理解できる。加えて、そのプロセスの時期区分を検討していくなかで、A男の挑戦に対する意味づけが、興味本位での挑戦（第1期）、保育者への依存関係による開始と継続（第2期）、助言と応援を支えとしたやや積極的な挑戦（第3期）、成功への手応えを感じての仕切り直し（第4期）というように変容していることも明らかとなった。このような対象児の内的変容や対象場面の移り変わりを具に可視化していくTEMによる分析は、特定の時間における子どもの経験に寄り添い、その変容を追体験するように捉える上で有効であるといえる。

(2) 挑戦中に存在する葛藤の経験

TEMでは、データに見られた選択の他に、あり得

ることが想定された選択もモデルに書き込んでいく(制度的・理論的に存在すると考えられる選択・行動)。また、複数人を対象とする場合には、各人の経験を1つのモデルに重ね合わせるように記述していく。そうした過程で、複数のラベル(選択肢)の並列状態が生じてくることもある。こうした状態は、対象児が経験した選択上の葛藤を表しているといえる。文章のみで経験を描写する場合は、複数の選択肢の併存状態を表現することには限界がある。TEMはそうした葛藤を目に見える形で描写できる手法であり、子どもが体験した迷いや試行錯誤をも含んだ生きられた時間における経験に迫ることができる。

(3) 選択に関する対象児の指向性

以上のような葛藤の結果や事実の前後関係を描いていく中で、選択に対する対象児の指向性が見えてきた。A男の場合は、挑戦をやめるという選択もあり得た状況にあっても、保育者の言動によって挑戦を開始

したり、継続したりしていることがわかる(SD1; SG3; SG5)。また、K男を手本にするようにという保育者の助言を守り続けていることもわかる(SG2; SG4; SG6)。これらの選択の結果は、A男が保育者に対して抱く意識を考察する手掛かりになるだろう。このように、TEMによるプロセスは、選択に影響する子どものパーソナリティを理解する窓口になると考えられる。

(4) 個人の経験と社会との関係性

TEMでは、個人の経験のプロセスに対する社会からの影響が、SDやSGとして描写される。それにより、個人的な経験が、他者や社会的制度等の影響を受けて決定されていることが見えてくる。A男の挑戦のプロセスの場合では、挑戦をやめようという選択肢が出現するたびに、保育者やK男からのSD・SGがもたらされ、等至点「満足して挑戦を終える」までの径路が開かれている。幼稚園という集団生活の場における個

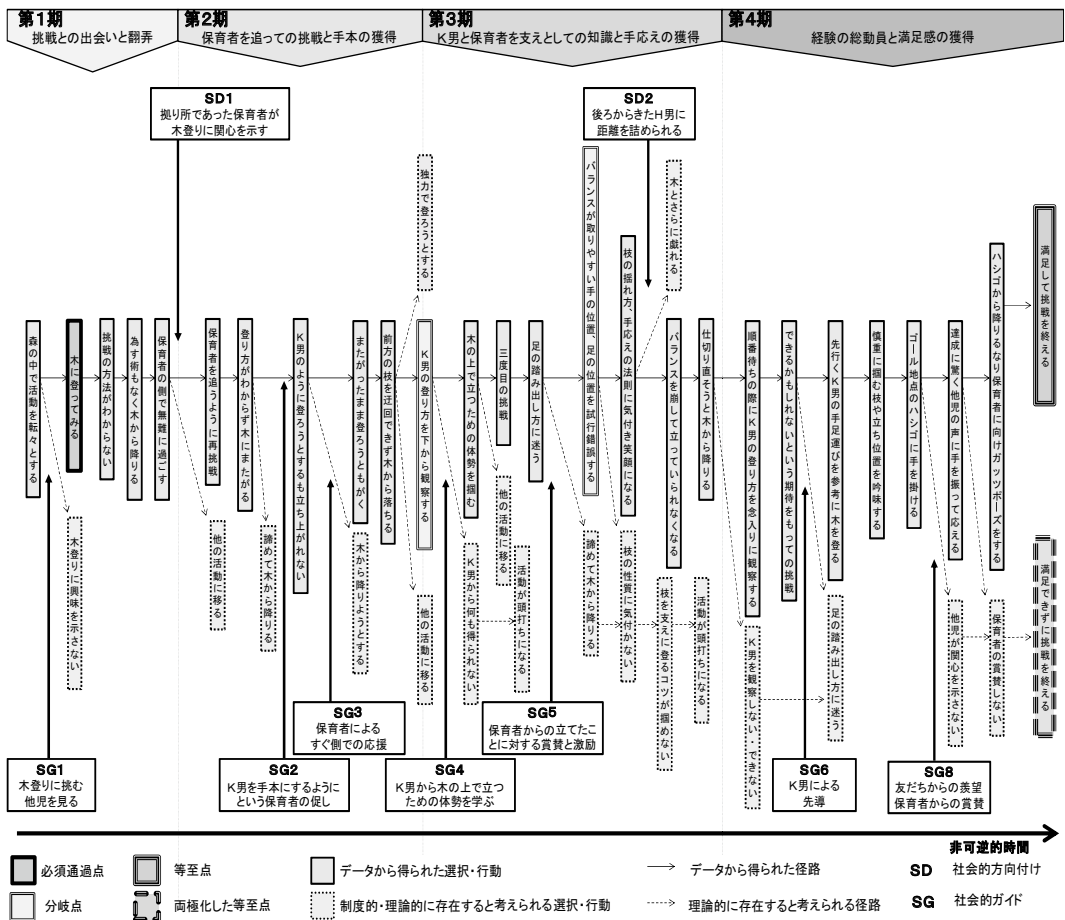


図2 TEMによるモデル：A男木登りに対する挑戦プロセス

人の経験は、このように他者や周囲の状況と密接に結びついて構築されていると考えられ、TEMはそうした経験の様相を可視化するツールとなる。

(5) 追求や支援のポイント

今回はA男1人のプロセスを描いたため、必須通過点や分岐点の分析上の意義を十分に見いだせなかった。しかし、こうしたプロセスを複数の子どもの対象に記述していくことで、必須通過点や分岐点が、活動がある方向に進む際の条件、誰もが陥る課題、活動の意味を決定する分かれ道として立ち現れてくる場合がある。それらは、プロセスのなかでも、特に追求や支援が必要なポイントとして理解することができるだろう。なお、複数人を対象とした分析法については、安田・サトウ(2012)に詳しく記されている。

(6) モデルを介した対話の可能性

分析によりもたらされた知見とは多少異なるが、TEMによる分析のもう一つの意義として、モデルを介した関係者間の対話が促されるという点が指摘できる。TEMのモデルに描かれる内容は、高度に抽象化された経験というよりも、手のひらサイズ化された対象者の経験である(荒川・安田・サトウ 2012)。そのため、それを読む人は、ラベルから事例の具体的なストーリーを追いつつ、葛藤の存在や対象児の変容を理解することができる。従って、モデルの内容や論点が共有しやすく、共同研究者や対象児の保育者などに分析結果を提示し、協議しながら対象児への理解を深めていくような協調が比較的容易にとれると思われるほか、共にラベルを配置したり、あり得た選択肢を書き込んだりするなど、協働でモデルを作成していくことも可能であると考えられる。実際にTEMを用いた分析では、研究者と対象者が協働でモデルを作成することで、双方にとって納得のいく経験のプロセスを描いていった例が紹介されており(安田・サトウ 2012)、保育者との協働分析をはじめとした様々な可能性があるといえる。

3. 分析上の課題と困難

(1) 研究の対象範囲を巡るジレンマ

本分析にあたっては、2010年6月14日に観察された事例についての経験を描くというように対象時期を限定した。それにより、A男の言動をできるだけ具体的に含みつつ、短いスパンでの微細な挑戦の意味の変容を捉えたモデルを描くことができた。また、比較的少ないデータ量、分析時間でモデルが完成できた。他方で、こうした分析の場合では、A男の挑戦の長期的な変容プロセスや、この経験が事例全体のなかにどう位置付くのかを検討することが困難である。選択肢とし

ては、事例1から事例10までの約1年間に渡るA男の挑戦の変容を対象とすることも十分に考えられただろう。しかし、その場合では、毎回の挑戦に見られる細かな言動や認識の変容などはある程度捨象せざるを得ない。また、モデルを構成するラベルもより抽象的な内容になることが予想され、読者に挑戦の情景を伝えることが難しくなってくると思われる。加えて、データの収集や分析に必要な労力・時間も増加するだろう。

また、本分析では、対象児をA男1人としている。それにより、A男の経験を掘り下げて理解するとともに、シンプルなモデルに表すことができた。他方で、木登りに挑戦する多くの子どもに共通して存在し、重要な意味を持つような必須通過点や分岐点を発見することはできなかった。そうした知見を得るにあたっては、複数の子どもの挑戦のプロセスを重ねたモデルを描いていく必要があるのだが、その場合では、モデルが煩雑になる、類似したラベルが複数人で共有化されることにより個人の経験が抽象化される、類似した経験をもつ子どもを複数人集める必要が生じる、などのデメリットや課題が発生するだろう。

TEMを用いるにあたっては、以上のような、対象範囲による研究成果や必要な時間・労力等の差異を把握し、目的や研究を行う上での制約に見合った計画を立てることが不可欠である。

V まとめと課題

ここまで、MGTAとTEMをそれぞれ用いて分析を行い、得られる知見や課題について検討してきた。それにより、MGTAが、個々の事例における事実の変遷や対象者の変容の要素を総合したプロセスの全体構造を捉える方法論であるのに対し、TEMは、実際の時間と共にある対象者の変容や事実の変遷のプロセスそのものを捉える方法論であることが見えてきた。本章では、以上のような各方法論について、本研究において表出した分析上の特徴や課題を整理するとともに、子どもの経験を描く上での可能性について検討する。

1. M-GTA 及び TEM の分析上の特徴と課題

プロセスの全体構造を捉えるM-GTAの特徴は、事例間に跨って存在する共通性や関係性を明らかにできること、分析対象とした種々の事例を一通り説明するとともに、今後展開される類似の事例を幅広く理解・予測するための仮説や枠組みが得られることである。また、比較的抽象度の高い理論や構造が得られることにより、対象を越えた研究成果の活用可能性が期待できる点もこの方法論の特徴といえるだろう。他方で、

分析の過程で個々の事例の具体性や時系列が捨象されてしまう点や、精度の高い分析のためには多くのデータと時間が必要となる点などが課題として感じられた。

一方、プロセスそのものを捉える TEM の特徴は、個々の事例に含まれる対象者の具体的な経験や時系列を保持しつつモデル化し、それに対する理解を深められる点である。加えて、単一事例のみを対象とする際にも有効性を発揮しやすい点や、分析結果に対する共通理解が得やすい点も、この方法論的分析上の特徴であると思われる。しかし、事例の具体性や時系列を保持する関係上、あらゆる事例に当てはまるような理論や構造の生成力が M-GTA に比べて低いように感じられた。これは観察期間や対象者を増やすことで一応対処可能ではあるが、その際には事例の具体性をいくらか捨象せざるを得ないことを踏まえる必要がある。

各方法論を使用するにあたっては、こうした特徴や課題を把握し、研究目的や時間・予算等の制約に適った選択をしていくことが当然ながら求められる。その際には、それぞれの方法論を用いる上で生じる分析前後の課題や、得られる知見の一例を明らかにした本研究を参照することが、初学者にとって有益であると考えられる。なお、これらの方法論は絶対的なものではなく、状況に応じた改良が認められるべきものであり、本研究の結果に留まらない各方法論の有効性を見出すことが、十分に可能であることを付け加えておく。

2. 子どもの経験を描く方法論としての可能性

以上のような M-GTA を用いて子どもの経験を描くことの可能性としては、次の2つがあげられる。第1に、蓄積した事例の間に存在する子どもの経験の共通性や法則性などが発見できることである。本研究において、挑戦が展開されていく際には、他者の存在や難易度のバランス等が重要であることがわかったように、対象児が経験した内容に迫る上で重要な要素やその構造が、同方法論により浮かびあがってくるのである。第2は、そうした知見を相互に関連づけていくなかで、種々の活動や体験を広く説明・予測する仮説や枠組みが得られる点である。これにより、例えば、木登りに挑む1人の子どもの事例の蓄積を通して、木登りという活動全体や、さらには身体的な活動全般を説明する仮説が得られ、それらに際した様々な子どもの状況の理解や、それに基づく支援や実践の見直し等に活用できることが期待できる。総じて、M-GTA は、ある行動や活動を行った特定の対象児の姿から、その行動や活動に広く存在する要素や構造を捉えようとする研究（例えば、数名のいざごぎ場面から、いざごぎという現象の要点や全体性を捉える研究）や、特定の

行動や活動を窓口に、その類似の活動や上位カテゴリーにあたる活動を説明することを目指す研究（例えば、お絵かき場面から、創作活動一般に適用できる活動の性質を明らかにする研究）に有効と考えられる。

TEM を用いることによる可能性としては、個々の子どもが経験した内容を、追体験するように理解できることがあげられる。対象児の1つ1つの行動や、他者や環境などからの影響をラベル化し、モデルを描いていくことで、その子がいつの段階で、どのような選択を迫られ、何に影響されそれらを決定したのかといった事実が鮮明に現れてくる。また、時間の経過に伴う対象児の行動の仕方や活動に対する意味づけの変容が捉えられるほか、あり得た選択肢を想定することで、経験に対する直線的な見方の見直しや、選択を決定する際のその子の傾向に関する理解が促される。別の可能性としては、多くの子どもに共通して存在する体験や、経験の分岐点を発見し、研究や実践に関する方向性を得ることや、モデルを介した関係者との協調などもあげられるだろう。総じて、TEM は、子どもの行動や意識の変容、及び、そこに働く他者からの影響等を具に捉え、ある段階に至るまでの経験を可視化しようとする研究（例えば、対象児が自由遊び時間にやりたい遊びを見つくるまでのプロセスの研究）に有効といえる。

以上のように、こうした各方法論を保育学分野の研究に導入し、それを用いて子どもの経験を描くことで、これまで個別に扱われてきた逸話記録から、子どもの経験の全体構造やプロセスを捉えるという可能性が示される。そうした可能性が、同分野における質的研究の質を高めるとともに、子どもに対する多角的な理解の可能性を開くものになると本研究は期待する。

3. 本研究の限界と課題

最後に、本研究の限界と課題について述べる。本研究では M-GTA と TEM について、それぞれ分析を試み、その結果に基づいて有効性や課題等を述べてきた。しかし、こうした分析結果は、当然ながら研究者のこれまでの分析経験や持ちうる知識の影響を受けていることが予想され、他の者が同様の試行を行った場合では異なる方法論の特徴が見出された可能性が考えられる。こうした分析者による影響を十分に相対化できていない点が本研究の限界の1つである。また、各方法論で対象事例の数が異なるなど、比較の際の条件が完全に統一できていない点も課題であると認識する。

加えて、本研究では M-GTA と TEM という2つの方法論の間に境界線を引いて比較しているが、こうした方法論同士は必ずしも相反するものではない。むしろ

ろ、相補的に用いることで、現象理解をより深めることができる可能性をもつものとして考えることが妥当である。運用の工夫次第では、TEMで時系列に沿ったプロセスを描き、その中の重要な分岐点で生じている現象の全体構造をM-GTAで詳しく分析するといったことなども可能かもしれない。対象についての理解を促すような質的研究の発展のためには、こうした方法論の協同の可能性についても、今後模索していくことが必要となるだろう。

【引用文献】

- 荒井美智子 (2009) 心理学における質的研究について 保育におけるエピソード記述研究を中心に. 聖和学園短期大学紀要. 46. 11-17
- 荒川歩・安田裕子・サトウ タツヤ (2012) 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例. 立命館人間科学研究. 25. 95-107
- Flick, U. (1995) Qualitative Forschung. Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg. 小田博志・春日常・山本則子・宮地尚子訳 (2002) 質的研究入門―「人間の科学」のための方法論. 春秋社.
- Glaser, B. and Strauss, A.L. (1967) Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research. Chicago: Aldine. 後藤隆・水野節夫・大出春江訳 (1996) データ対話型理論の発見―調査からいかに理論をうみだすか. 新曜社.
- 川喜田二郎 (1967) 発想法―創造性開発のために. 中央公論社.
- 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い. 弘文堂.
- 木下康仁 (2005) 分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ. 弘文堂.
- 木下康仁 (2007) ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂.
- 木下康仁 (2009) 質的研究と記述の厚み―M-GTA・事例・エスノグラフィー. 弘文堂.
- 衣笠一茂 (2003) 質的研究方法論の可能性―社会福祉の「原理」と「価値」を考えるための研究方法についての検討. 九州看護福祉大学紀要. 5 (1). 107-116
- 木村美千代・村岡眞澄 (2007) 幼児の発達と学びの連続性について―「トバール」を使った短なわとびの実践から. 愛知教育大学幼児教育研究. 13. 7-14.
- 小山優子 (1998) 幼児教育における質的研究の方法論的一試案―幼児のごっこ遊びの事例分析を通して. 保育学研究. 36(2). 185-192
- 鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門―実践と質的研究のために. 東京大学出版会.
- 無藤隆 (2008) 質的研究の動向. 日本家政学会誌. 59(1). 47-51
- 無藤隆・倉持清美 (2009) 保育実践のフィールド心理学. 北大路書房.
- 日本質的心理学会 (2010) この本からはじめる質的研究―テキスト書評特集. 質的心理学研究. 9. 186-201
- 能智正博 (2011) 質的研究法. 東京大学出版会.
- 岡本祐子・砂上史子・瀧川光治・無藤隆 (2004) 保育学研究における質的アプローチの有用性(1)―データ分析法を中心に. 日本保育学会大会発表論文集. 57. S14-S15
- 奥山順子・佐藤敬子 (2006) 保育の質的向上を目指す保育実践研究の方向―保育者によるエピソード記録を中心とした園内研修の試み. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要. 28. 133-143
- 大谷尚 (2008a) 質的研究とは何か―教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして. 教育システム情報学会誌. 25(3). 340-354
- 大谷尚 (2008b) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案―着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学). 54 (2). 27-44
- 西條剛央 (2008) 質的研究とは何か. 新曜社.
- 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法―原理・方法・実践. 新曜社.
- サトウタツヤ (2009) TEMではじめる質的研究―時間とプロセスを扱う研究をめざして. 誠信書房.
- 柴山真琴 (2006) 子どもエスノグラフィー入門―技法の基礎から活用まで. 新曜社.
- 想厨子伸子 (2010) 5歳児における竹馬活動の教育意義―幼児の自信を育てる (保護者の質問紙調査より). 愛知教育大学幼児教育研究. 15. 41-48
- 田垣正晋 (2005) 質的研究隆盛への期待と不安―「お手軽」な研究手法にならないために. 看護と情報: 看護図書館協議会誌. 12. 67-68
- 得丸さと子 (2010) ステップ式質的研究法―TAEの理論と応用. 海鳴社.
- 津守真・松井とし・本田和子・浜口順子 (1974) 人間現象としての保育研究. 光生館.
- 安田裕子・サトウ タツヤ (2012) TEMでわかる人生の径路―質的研究の新展開. 誠信書房.